

生ける神に仕えるダニエル（3）

2009. 2. 3 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ダニエル書 2章28節から35節

「しかし、天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床であなたの頭に浮かんだ幻はこれです。王さま。あなたは寝床で、この後、何が起こるのかと思い巡らされましたが、秘密をあらわされる方が、後に起こることをあなたにお示しになったのです。この秘密が私にあらわされたのは、ほかのどの人よりも私に知恵があるからではなく、その解き明かしが王に知らされることによって、あなたの心の思いをあなたがお知りになるためです。王さま。あなたは一つの大きな像をご覧になりました。見よ。その像は巨大で、その輝きは常ならず、それがあなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。あなたが見ておられるうちに、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕きました。そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に砕けて、夏の麦打ち場のもみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました。」

ダニエル書2章全部は、家に帰ってからゆっくり読んでいただきたいと思います。今、28節で読まれたように、主は「秘密をあらわすお方」です。私たちが誇りをもって、喜びをもって、「私たちの主は何でも知っておられ、秘密をあらわすお方である」と信じていることができ、賛美することができるのではないかと思います。

この確信を持っていたのは、ダニエルとその三人の友だちでした。彼らは真つ暗な恵まれない環境の中で、なお、信仰をもってこの秘密をあらわされる主をほめたたえたのです。

私たちの住んでいる世界の将来は、どうなっているのでしょうか。私たちの信仰生活を確かなものとし、動かないようにしっかりと歩むには、世界の将来を知っておく必要があるのではないのでしょうか。世界の将来を私たちに教えてくれるのは、いったいどなたでしょうか。星占いが教えてくれるのでしょうか。または、降神術者が教えてくれるのでしょうか。そのほかのいろいろな宗教が教えてくれるのでしょうか。

ある人が南ドイツのウルム市で生まれた有名なアインシュタイン博士に、質問したそう

です。「第三次世界戦争はどのような戦争になるのでしょうか」と。博士は、「第三次世界戦争のことはまだよく分からないけれど、第四次世界戦争は原始時代の戦争のように人間が石を投げ合って戦うだろう。というのは、次に起こる第三次世界戦争がそれほどひどく、ほとんど世界を破滅に近づける可能性があるからだ」と言ったそうです。聖書を読むと、その戦争で地上の三分の一が殺されると記されています。私たち人間には想像できないことです。

この世における次の戦争のことを考えている人たちもいますが、いったい誰が正確に将来を告げてくれるのでしょうか。私たちの将来に何が起こるか詳しく教えてください、**「まことの神ご自身」**です。ですから、この28節には次のように書かれています。

ダニエル書 2章28節

「天に秘密をあらわすひとりの神がおられ、この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル王に示されたのです。あなたの夢と、寝床であなたの頭に浮かんだ幻はこれです。」

アモス書の中に、もう一つの大切な箇所があります。

アモス書 3章7節

まことに、神である主は、そのはかりごとを、ご自分のしもべ、預言者たちに示さないでは、何事もなさない。

と。聖書は、主の命令どおりに預言者たちによって書かれたものです。ご存じでしょう。宗教はたくさんあります。みな別の教えを持っています。けれども、宗教の教えを読んでも、将来についての預言は一つもないのです。たとえあったとしても、すぐにおかしいと分かってしまうからです。聖書の半分は預言です。そして、今まで全部預言どおりになったのは、大変不思議なことではないでしょうか。ですから、聖書は確かに人間によって書かれたものですが、「神のことば」です。

主は、ダニエル書2章を通して、将来何が起こるかをはっきり教えてくださいました。主は、ご自身が世界歴史の支配者であられ、王を立て、王を配するの、すべてご自身の御手のうちにあることを教えるために、当時のネブカデネザル王に一つの夢を見させなさいました。

初めに、王はこの夢を人間的な知恵で解き、将来を知ることができると思ったのですが、それは決してできないことであることを最後に悟りました。主がネブカデネザル王にこの夢を見させなされたのは、彼だけでなく私たちも、世界の将来がどのようになっていくか、はっきり知るためだったのです。聖書の預言は、将来世界に何が起こるかを告げています。

主なる神に与えられた預言を学び、それが預言されてから数百年後、また千年も後に、その預言どおりに歴史が成就されていることを見ると、主の御前に膝をかがめて礼拝せざ

るを得ません。

ネブカデネザル王が見た夢は、紀元前六百年からこんにちに至るまでの四つのいわゆる世界帝国について、預言しています。

*第一番目。夢の中で最初に出てくるのが、「金の頭」です。

これは、当時の世界帝国バビロンを表わしています。

ダニエル書 2章32節

「その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、」

と書かれています。そして、

ダニエル書 2章37節、38節

「王の王である王さま。天の神はあなたに国と権威と力と光栄とを賜い、また人の子ら、野の獣、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとく治めるようにあなたの手に与えられました。あなたはあの金の頭です。」

*第二番目。次に夢の中に出てくるのは、「銀の腕と胸」です。

これは、次に続くメディアとペルシヤの国を表わしています。

ダニエル書 2章32節

「その像は、頭は純金、胸と両腕とは銀、…」

とあります。そして39節。

ダニエル書 2章39節前半

「あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こります。」

と書かれています。

*第三番目。その次に夢の中に出てくるのが、「青銅の腹ともも」です。

これは、ギリシャ帝国を表わしています。「腹とももとは青銅」とあります。そして、

ダニエル書 2章39節後半

「次に青銅の第三の国が起こって、全土を治めるようになります。」

*第四番目。そして最後に、「鉄でできたすね」の夢をみました。

これは、統一されたローマ帝国を表わしています。

ダニエル書 2章33節

「すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。」

ダニエル書 2章40節

「第四の国は鉄のように強い国です。鉄はすべてのものを打ち砕いて粉々にするからです。その国は鉄が打ち砕くように、先の国々を粉々に打ち砕いてしまいます。」

紀元前476年にローマ帝国は、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、その他多くの国に分裂しました。それ以来今日まで、この分かれた国々は、粘土と鉄がよく交らないように分裂したまま、また対立したまま続いてきているのですが、皆さんご存じのように、最近いわゆるEUができ、27の国々は一つになりました。

この現実を通して言えることは、宗教が存在している限り平和になり得ません。最後に、宗教はみな一つにしよう、と。今のローマ法王もそのような目的を持っていますが、最近大変迫害されるようになってきているのです。しかし、目的はこれなのです。みな一つになる。けれども、結果は反キリストが現われて、彼はすべての宗教を徹底的に否定するようになり、「神は俺だ。俺を拝まないとおしまいだ」と。今のヨーロッパの国々の努力の結果はそのようなものになる、ということなのです。

ネブカデネザル王は、当時自分の国とその勢力の強さを考え、この「自分の国バビロン帝国は永遠に滅びないで続くだろう」と思ったのです。独裁者はだいたいそのように考えるのです。ドイツのヒトラーは約束したのです。「私の国は千年間もつ」と…。千年間。しかし12年で終わりました。

バビロンの周りは、高さ100メートル、厚さ27メートル、地下11メートルの二重の堀で囲まれ、その周りは96キロ。今でもちょっと想像もつかないほど強い丈夫な堀で囲まれていました。しかも、城壁の間には深い堀が掘られていて、水で満たされ、外敵から完全に守られるような仕組みになっていました。「これならもう安全だ」と。

今このバビロンの王ネブカデネザルは、自分は世界の支配者ではなく、自分の上に、主の主、王の王がおられ、やがてバビロンは滅びるという夢を見ました。実はそのとおりになっていました。

ある夜、巨大な堀の下を突き抜けて流れているユーフラテス川の水が枯れ、ペルシャとメディアの軍隊が城壁の中に忍び込み、陥落するとは到底考えられないことでしたが、バビロンの町は滅ぼされ、聖書の預言は見事に成就したのです。

しかし、この第二の世界帝国メディアとペルシャも、そんなに長くは続きませんでした。ギリシャの有名なアレクサンダー大王が興り、メディアとペルシャを5年の間に占領してしまい、ここでも聖書の預言は確実に成就したのです。

このアレクサンダー大王によって打ち建てられたギリシャ帝国も、預言のとおりやがて滅んでいく運命にありました。鉄のように強大なローマ帝国が興り、まもなく全世界を支配するようになったのです。

ネブカデネザル王が見た夢の中には、やがて滅んでゆく四つの世界帝国ばかりでなく、その後に永遠に続く国も入っていました。人手によらず切り出された石が、像の足を打ち砕いた時、像の全部が砕けて崩れ落ちたという夢も見ました。

ダニエル書 2章34節、35節

「あなたが見ておられるうちに、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕きました。そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に砕けて、夏の麦打ち場のもみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました。」

その実現について黙示録に書かれています。ちょっと読んでみましょう。

ヨハネの黙示録 11章15節から17節

第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。」それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、言った。「万物の支配者、常にいまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。」

夢を考えていきますと、世界歴史は、徐々に良いほうには向かっていません。次第に、世界の状態は悪くなってきています。初めは金であり、終わりは粘土となり、やがて滅んでしまうことがよく分かります。分裂して弱くなってしまいます。頭、胸、両手、両足、胴、みなばらばらになってしまいます。十本の足の指もばらばらになっていきます。

黙示録では、十の角について書かれています。これはみな同じ意味です。

ヨハネの黙示録 17章8節

「あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。」

そして、

ヨハネの黙示録 17章12節、13節

「あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。この者どもは心を一つにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。」

と書かれています。

ダニエル書2章に書かれている「人の手によらずに切り出された石」は、やがて雲に乗って来られ、ご自身の御国をお造りになる主イエス様を表わしているのです。

今の世界の情勢がだんだん良くなって神の国になる、と聖書は語っていません。一度破壊され、上から新しい神の国が地上に置かれる、と聖書は語っています。

ダニエル書に戻りまして、7章を見ると、次のように書き記されています。

ダニエル書 7章13節、14節

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

イエス様は同じ事実について話されました。

マタイの福音書 24章30節

「そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見ます。」

とあります。

世界が将来どうなっていくか預言できる人間は誰もいません。また預言しても、それが実現しないのを恐れて、誰も預言する者はいません。他の宗教と名のつくどれを見ても、世界の将来を預言している宗教はありません。けれど「まことの神」は、みことば、聖書を通して、世界の将来をはっきりと預言なさいました。それまで聖書とまことの神を信じることのできなかった多くの人々も、このダニエルの預言とその成就を聞かされ、砕かれて、イエス様の御前に悔い改めて信じるようになった人々がたくさんいます。

私たちにとって大切なことは、もちろん将来のことについてよりも、ダニエルと三人の友だちのとった態度ではないでしょうか。ダニエルとその友だち、それから、今の時代と私たちと比較することは、本当に大切なことではないかと思えます。

ダニエルとその友だちはどのような人たちであったかと言いますと、心からみことばを信じ、主に頼った人々でした。ヘブル書11章に、いわゆる信仰の人がたくさん書かれています。その中にダニエルと三人の友だちの名前は記されていませんが、33節、34節を読むと、ダニエルとその友だちも信仰の書ヘブル書11章に含まれていることが分かります。11章33節です。

ヘブル人への手紙 11章33節、34節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

と書かれています。ダニエル書で一番言おうとしていることは、「暗やみの中での信仰」だと思います。私たちは今、もうすぐイエス様がお出でになろうとしている末の世、最暗黒の世に生きていることは、疑いもない事実です。ですから、私たちの生きているこの世

は、ダニエルの生きた頃に比べることができると思います。霊的な原則は、どの時代においても同じです。御霊がお働きになって、私たちがダニエルやその友たちと同じ信仰の人となることができれば、本当に幸いです。

多くの人は、世界はだんだん良くなるのだろうか、だんだん悪くなっていくのだろうかと考えます。その両方だと言えるでしょう。良いところはだんだん良くなり、悪いところは大変な速さで悪くなるのではないかと思います。

イエス様はご自分の教会を建て上げるために働いておられ、ご自分に属する人々を完全な者となさるために、いろいろな苦しみ、悲しみ、困難を通して練りきよめ、ご自分の形に似せようとされています。これはだんだん良くなる面です。

これと反対に、サタンからのものは、ますます悪くなる一方です。主なる神のみこころは、ご自身に属する者、主の恵みによってみ救いにあずかるようになった者に、傾け尽くされています。ダニエル書7章を読むと、この中に「聖徒」という言葉が六回も出てきて、主なる神がどんなにご自分に属する者を愛してくださっているかが書かれています。

良いところはますます良くなり、みことばの完成に向かっていきます。救われた者は成長し、神の国は成熟していきます。悪いものも、ますます悪くなり、「悪」の完成に向かっていきます。良い面も悪い面も、すべての出来事を中心にイエス様の「からだなる教会」があります。私たちは教会という言葉あまり使いたくありません。なぜなら、教会とは一つの建物だと思っていますし、或いは、一つの団体と思っているからです。「聖書の中に出てくる教会」とは、人間の造ったものではありません。イエス様に属するものです。イエス様はかしらであり、この「かしらなるからだ」こそ、教会と言われています。

良い面も悪い面もあらゆる出来事は、主のものとなった者が、イエス様の御姿に似る助けをしているのです。主のご栄光と主のご目的は、すべて「からだなる教会」にまかせられています。全天、全地、悪魔までが、救われた者が御子イエス様の御姿に変えられる助けをしているのです。

二、三の実例を見てみましょう。

・サムエルの母であるハンナについて書かれています。短い文章です。

サムエル記・第一 1章10節

ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。

サムエルの母ハンナは、非常に悩んでいました。確かに彼女は苦しんだのですが、あきらめなかったのです。彼女はすべてを主にゆだね、祈りました。これこそ勝利の秘訣です。主のみもとに行く者は捨てられません。その人は主の偉大な解放を経験します。

ひとりのやもめの息子が亡くなりました。彼女がいかに苦しんだか想像できます。彼女はエリシャという預言者のところへ行って、自分の悩みを打ち明けました。隠そうとしな

かったのです。預言者は、苦しみ悩んでいるこのやもめをこれ以上見ていることができな
せんでした。その時、預言者はいろいろな慰めの言葉をかけようとはしなかったのです。

列王記・第二 4章33節

エリシャは中にはいり、戸をしめて、ふたりだけになって、主に祈った。

その結果、主は死んだ子どもを生き返らせ、栄光を現わしてくださいました。私たちが
苦しい状態に置かれ試練にあうとき、祈ることこそ勝利の秘訣です。

・イザヤ書の37章の中で、ヒゼキヤ王について書かれていますが、彼は五つの驚くべき
手紙、ひどい手紙を受け取りました。けれど、彼はそのことを怒ったり、不満を言ったり
しなかったのです。またその手紙を公に見せたり、愚痴を言ったりしませんでした。王は
何をしたのでしょうか。

イザヤ書 37章14節

ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取り、それを読み、主の宮に上って行っ
て、それを主の前に広げた。

主に至る戸は、いつも開かれています。主は、私たちが私たちの問題と悩みをもって主
のみもとに行き、主に信頼することを待っておられます。主は奇蹟を行なわれるお方です。
主にとって不可能なことは一つもありません。

主に忠実に仕えたダニエルが絶望的な状態に置かれたことがありました。彼の敵対者た
ちは王に懇願し、「王」ではなく「神」に願い求める者はみな、獅子の穴に投げ込まれる
べきである、という変えることのできない法律を一箇月以内に発令するように迫りました。

ダニエルはその時、何をしたのでしょうか。ダニエルは怒って王のところに行ったので
しょうか。ダニエルは、敵の卑劣なやり方に対して怒ったのでしょうか。ダニエルは大勢
の友だちを呼び集め、逃れ道を求めたのでしょうか。そのうちの何一つ、彼はしなかった
のです。先週読みました箇所、ダニエル書6章10節。

ダニエル書 6章10節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋
上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に
三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

「感謝していた」と。

ダニエルは、法律によって許されていないことをしたわけですが、その時、彼は主に叫
び、祈り、すべてを主にゆだねたのです。ダニエルは意識的にすべての事を主の前に申し
上げました。彼は、主が必ずみわざを成してくださいと確信していたのです。このような
信頼は、決して決して失望させられることはありません。

不可能と思われたことが起こったのです。すなわち、獅子はダニエルにあえて触れようとはしなかったのです。信じられないようなことですが、本当だったのです。私たちの主は生きておられます。主は、主に避けどころを求める人たちの人生において、主が全能者であられることを現わしてください。

使徒行伝 16 章を見ても、似ていることが書かれています。無実の罪で牢獄に入れられたパウロとシラスも、同じ態度をとりました。彼らは鞭打たれ、凶悪犯罪者のように取り扱われましたが、彼らは決して反抗的な態度をとらなかったのです。また、彼らは、「なぜ主はそんなことを許しておられるのか。私たちは主にだけ仕えているのに、許しがたい暴挙ではないか」とは言いませんでした。25 節です。

使徒の働き 16 章 25 節前半

真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、

「真夜中ごろ」、一番暗い時です。

彼らは、なぜそのように導かれたのか理解できませんでした。けれど、主は決して間違いをなさいません。このような導きも自分たちにとって最善の益となるに違いないということを知っていたのです。ですから、彼らは祈りつつ賛美の歌を歌うことができたのです。

イスラエルの民は、本来主の御栄えを現わし、主の権威を証ししていかなければならぬ人々だったはずですが、ダニエルの時代のイスラエルの民は、それからおおよそかけ離れた状態に落ちていました。当時のイスラエルの民は、主のご支配を証しするどころか、敵の手に渡り、捕らわれの身となって、外国であるバビロンに移されていました。かつてのイスラエルの民は、主に従順であった時、世界歴史の中心に位し、他の民はみなイスラエルの神の前に膝をかがめたものでした。けれど、ダニエルの頃のイスラエルの民は、力がなく、喜びがなく、権威もありませんでした。憐れにも捕らわれ、バビロンに移されていました。主のご支配からはずされたイスラエルの民は、この世の国バビロンによらなければ食べることも、着ることも、住むこともできない捕らわれの身となってしまいました。

こんにちにおいても、同じではないでしょうか。即ち、主によって救われた人々は、国々の中で権威を持っているのでしょうか。主のご支配が私たちの真ん中に、さやかに現わされているのでしょうか。私たちは、悪魔の憎しみを感じるのでしょうか。戦っているのでしょうか。

イエス様に出会って救われた人々に、パウロは、彼らの成長のために書いたのです。

エペソ人への手紙 6 章 12 節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

私たち信じる者の戦い、格闘は、血肉、即ち、「目に見える世界」に対するものではなく、悪霊、悪魔に対するものです。決して人間に対するものではありません。

エペソ人への手紙 3章10節

これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、

「教会を通して」、イエス様のからだなる教会を通して、です。

こんにちの教会の証しは弱くなっています。ゼロに近いものになってしまっています。教会を通して主のご支配が現わされるよりも、教会はこの「目に見える世界」によって、支配されているのではないのでしょうか。私たちが、御霊によって妥協することのない主のご支配のもとにある証し人となることができれば、本当に幸いです。

初代教会の証しとはどのようなものだったのでしょうか。ローマ書1章16節を読むと、次のように書かれています。パウロはローマにいる兄弟姉妹に書いたものです。

ローマ人への手紙 1章16節

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

もちろん「福音」は、ひとつの教えではありません。「イエス様」です。そうなるためには、まず主のみこころが私たちの心となっていなければなりません。

ダニエルとその友だちは、主のみこころを自分の心としていた人々でした。このような人々は、今の時代において一番必要とされている人々です。これらの人々は、主との交わりをなくした人々と主との間を結ぶ帯のような役目をしています。これらの人々は、日々上から主の新しい力をいただいている人々です。

ダニエルとその友だちは、本当にはっきりとした態度をとったのです。主から離れ、霊的に貧しくなり、落ちてしまったイスラエルの民のために、どこにも妥協することなく、常にとりなし続けたのです。眠っているイスラエルの民、信じる者と主とを結ぶ帯の役目をしていただけです。ダニエルとその友だちのような人々を、主はこんにちも探し求めておられますし、必要としておられます。

ダニエル書を読むと、ダニエルとその友だちは、同胞イスラエルの民が霊的に貧しくなり、駄目になっていることをよく知っていた人々でした。けれども、彼らはそれだけではなく、みことば、聖書もよく知っていたのです。彼らは、聖書をよく学んだので、みこころをよくわきまえたのです。そして主のみこころを成就するために、自らを主にささげました。彼らは、本当に開いた心で聖書を読んだのです。

多くのキリスト者は、みことばを読んでも人格が変えられていきません。みことばは、お客様のように出たり、入ったりしています。ダニエルとその友だちの場合は、全く違いました。「みことば」が彼らの心のうちで「主人」となり、彼らを支配し、彼らはみことばによって主のみこころのままに変えられていきました。彼らは、主のみこころを知ると、少しも妥協することなく、主のみこころを成し遂げるために、己をささげたのです。その結果はどのようなものだったのでしょうか。どのようになろうと、彼らは恐れなかったのです。火の炉も、獅子の穴も、彼らは問題ではなかったのです。

それぞれの時代にあって、主はこのような人々を探し求めておられます。彼らは、主のご目的に心の目が開かれた人々でした。そして、彼らは眠っている信者と主との間を取り持つとりなし手となった人々だったのです。

聖書の真理を、ただ学び、ただ聞き、ただ宣べ伝えるだけでは何もなりません。聖書の真理が、私たちから切り離すことのできない、私たちのいのちとなっていなければなりません。歴代誌下の16章9節、日曜日もちょうと引用したのですが、ぜひ覚えるべきみことばです。

歴代誌・第二 16章9節前半

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心のご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。

主は働こう、祝福しよう、用いようと望んでおられます。けれども、主を第一にしなれば、主は何もおできになれません。

私たちは聖徒たちに対する主のみこころを知っているのでしょうか。また、この主のみこころにそって、みこころのままに造り変えられていっているのでしょうか。

今、話しましたように、主のみこころが私たちの心にならないと、主は私たちを用いることがおできになれません。ですから、次の大切な点、即ち、主のみこころを行なっていく人々、即ち、主のご支配を受けている証し人は、悪魔の攻撃の真っ只中に置かれているということです。

ダニエルとその友だちは、どのように責められたのでしょうか。彼らの証しに対する報いは、決して生やさしいものではありませんでした。妬みと憎しみと死が、彼らを襲ってきました。しかし彼らは少しの動揺も見せず、固く立って動かず、次々とやってきた戦いに、勝利者として勝ち進んでいったのです。

このダニエル書1章から6章までに書かれている六つの戦いについて、来週一緒に考えてみたいと思います。

了